

新しい温泉地の過ごし方をみんなで考えよう

NEWS LETTER No.1

チーム新・湯治

「チーム新・湯治」ニュースレター 発行元：環境省温泉地保護利用推進室 発行日：平成31年1月25日



第1回セミナーの参加者で撮影

中央左から、橋本栄子氏、中澤敬氏、鈴木和江氏(講師)

「チーム新・湯治」の活動～190会員が参画～

多くの人が温泉地で地域資源を楽しみ、滞在を通じて心身をリフレッシュさせる。そして、温泉地に多くの人が訪れることで、温泉地にぎわいを生み出していく。このような「新・湯治」の目指す温泉地の姿を実現するためには、多様な関係者の連携が必要不可欠です。

「チーム新・湯治」は、温泉地を中心とした自治体、団体、企業等による多様なネットワークづくりを目指した取組です。本ネットワークを通じて、温泉地において多種多様な連携が生まれ、これまでになかった新しい取組が展開されることを期待しています。

平成30年4月から「チーム新・湯治」チーム員を募集開始。平成30年12月27日時点で190件の皆さまにご加入いただきました。温泉地に様々な視点から関わるチーム員の多様な活動、そして、それぞれの関心をお互いに知り、理解を深めながら、“日本の温泉地”を一緒に盛り上げていきましょう！

「チーム新・湯治」セミナーの開催

チーム員の募集と並行して、チーム員が集い共に学ぶ「チーム新・湯治」セミナーを開催しています。平成30年度は『温泉地の滞在を改めて考える』を大テーマに、計3回のセミナーを開催します。第1回セミナーの開催結果は、下記の通りです。

第1回 温泉地でのイマドキの湯治を考える

73名が参加
うちチーム員30団体・41名

平成30年12月5日に「イマドキの湯治までの展開」として、草津温泉（群馬県草津町）、鉄輪温泉（大分県別府市）、観音温泉（静岡県下田市）の3講師から事例紹介をいただいた後、インバウンド対策、長期滞在のための過ごし方、泊食分離、若い世代への「湯治」のアプローチについて、参加者と意見交換を行いました（詳細は、以下を参照）。

開会挨拶では、勝俣孝明環境大臣政務官より「新・湯治」推進の背景として「温泉地の社会的役割の変化」や温泉地活性化の大前提となる「温泉資源の保護と持続可能利用」についてお話をいたしました。その後は、運営事務局より全国各地の「新・湯治」や「チーム新・湯治」に関する動きなどを紹介いたしました。

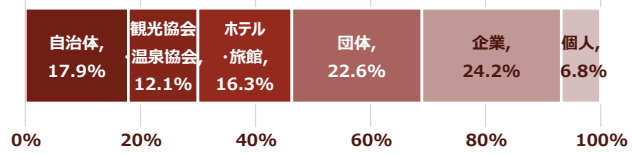
事例1.温泉地全体での湯治 草津温泉の新・湯治について 草津温泉観光協会 会長 中澤敬氏

事務局より 古くからの湯治に加えて、各時代時代でその時々ニーズや未来の過ごし方を組み取りながら、新たな湯治、その時々イマドキの湯治に取り組み、その積み重ねが現在の草津温泉の多様な湯治へとつながっています。

草津温泉は、ドイツ人医師ベルツの考え方も採り入れながら、時間湯や森林浴など多様な湯治スタイルを有する『湯の街草津』と『高原リゾート草津』の二つの顔を確認するとともに、多様な宿泊施設が存在することで、いろいろな角度から温泉に慣れ親しんでもらえるようになったとのこと。予防医学の見地から、**温泉に浸かり、病気になる前に違う環境でリフレッシュし、医療費を下げ、日本を健全な社会へとしていく**ために、「新・湯治」は非常に重要であり、これから草津温泉では『3日湯』『5日湯』を提案し、長期滞在を狙うとのこと。また、高齢化社会を明るく捉えてCCRCと温泉地を結びつけ、**仕事をリタイアした人たちが第二の人生を楽しめる街づくり**を、いろいろな温泉地で取り組んでいく必要がある、とのことでした。

《表 チーム員の種別

(n=190,単数回答,12月27日時点)



《表 チーム員の関心のある分野 上位10

(n=190,複数回答,12月27日時点)

順位	分野 (全26選択肢のうち上位10)	選択者数	選択率
1	地域資源を活かしたツーリズム	140	73.7%
2	温泉地での健康増進プログラム	126	66.3%
3	訪日外国人観光客に対する取組	112	58.9%
4	温泉地間の連携	110	57.9%
5	食または料理	104	54.7%
6	温泉の効能	103	54.2%
7	自然等を活かしたアクティビティ	102	53.7%
8	温泉街等のまちづくり	96	50.5%
9	温泉地活性化に向けたマスタープランづくり	94	49.5%
10	源泉の維持や管理	86	45.3%

事例2.宿からまちへの湯治 柳屋のこと 鉄輪のこと サリーガーデンの宿 湯治柳屋 代表取締役 橋本栄子 氏

事務局より 鉄輪温泉の昔の湯治を復活させたいとの想いで宿を引き継がれ、平成26年に『湯治柳屋』としてリニューアルオープン。昔からあったものを現代人の感性に響くカタチで設え表現するとともに、思いにお客さまが過ごせるよう、多くの選択肢を用意。さらに宿をまちへ開き、まちの人と繋がりが、まちに「湯治」を展開されています。

「湯治」という言葉を用いて『湯治柳屋』と名付け直したのは、「湯治」という言葉の持つ温もりを大事にしたい、「湯治」は粋なスタイルであり、レトロでモダンでノスタルジックな「湯治」をより粋なものとして伝えたいとの想いからとのこと。震災を機に、宿の使命や町のあり方、美しく生きる・豊かに暮らすとはどのようなことかなどを立ち止まって考え、試行錯誤しながら現在に至る。アートを通じて柳屋の空気を創り出すとともに、長期滞在に必要な食の充実に向けて、まちのスーパーに敢えて食材セットを販売してもらうなど、まちの力も借りながら取組を展開。仕事をしながらの「湯治」（ワーケーション）や、美と健康を軸とした学ぶために通う「湯治」など、「湯の恵を分かち合う」ための様々な取組をこれからも行っていき、とのことでした。

意見交換会 ～イマドキの湯治に向けた意見（一部のみ紹介）

インバウンドへの情報発信 中澤氏からは、知ってもらうだけでなく、来訪した人への情報提供も重要で、草津温泉ではAIを活用しているとのこと。鈴木氏からは、情報はいろいろなところで出されているが、本当の力は人であり、人から人に広がると失敗はしないとのこと。
スパの提供・スパの人材育成 温泉ビューティー研究者石井宏子氏からは、旅先で受けるスパはそこに行かないと受けられない特別なもので、旅の時間を割いて受けるべき価値があるものでなければならぬ。また、一つの宿が人材を抱えて育成しなくても、温泉地全体で一軒のスパ施設を設け、全部の宿から希望する人にそこに行ってもらおうという考え方もあるのでは、という提案をいただきました。

日常の食 跡見学園女子大学教授松坂健氏からは、自炊センターや食事担当コンシェルジェを設置し、本当にセルフで過ごせる仕組みを整えてはとの提案がありました。中澤氏からは、「ハレ」と「ケ」の区別をつけ、プロが作る「ケ」の料理を美味しく食べてもらえるように提言していく必要があるのではないか。橋本氏からは、社員食堂として造ったものをコミュニティのダイニングとし、さらにもう少し日常生活に入り込めるよう、惣菜と弁当屋をスタートさせたとのことでした。
若い世代への「湯治」の浸透 鈴木氏からは、浸透させていくのはこれからで、「1泊でもできる湯治が新・湯治ではないか」とのご意見をいただきました。

チーム員との活動報告～新・湯治セミナー in 阿賀野市

新・湯治の推進に向けて、環境省温泉地保護利用推進室では、チーム員であるNPO法人健康と温泉フォーラムとの共催で、平成30年10月19日に新・湯治セミナー「地域で活かす温泉-新・湯治プロジェクト」を新潟県阿賀野市で開催しました。セミナーでは、環境省が「新・湯治」を提案する前から温泉を大事にした地域づくりを行っている3温泉地から各地の取り組みなどについてご報告いただくとともに、今後新・湯治を進める上で、どのような考え方、体制で取り組むべきかについて意見交換を行いました。

鳴子温泉郷川渡温泉観光協会長の遊佐久則氏からは「温泉に入っていたが（身体が良くなった）」という関係者の共通認識をベースに、「ゆとくらし」を提唱し、温泉プラスアルファの時間の過ごし方を創り出そうと意志ある方々が奮闘されているご状況などを報告いただきました。

続いて、湯野浜100年株式会社取締役の阿部公和氏からは皆に共通したものを洗い出す過程で「海・白浜・温泉」が湯野浜の変わらない価値だと認識されたことや、湯野浜100年株式会社という架空の会社を設立し、旅館組合、観光協会、源泉会社の組織化を図り取り組みを進められていること、理念の共有とともに小さな取り組みとその成功体験を積み重ね合意を得てこられていることが報告されました。



阿賀野市ふれあい会館で開催

事例3.宿での湯治 観音温泉の湯治 滝野川自動車・観音温泉 代表取締役社長 鈴木和江 氏

事務局より 観音温泉は、山の中の秘湯温泉地として、その泉質や周辺の敷地を活かしながら、お客さまや社会のニーズを捉えて、多角的な事業を展開されています。例えば、飲泉、湯治客室の設置のほか、全調理への温泉水の使用、温泉水を使った化粧品や純米酒づくり、温泉を利用したハウス野菜の栽培とその収穫体験など。

観音温泉は、現在でこそ、自然遊び、ふれあい、文化体験、美容健康、食など様々な湯治を提供できるようになったが、そこに至るまでには様々な苦労があったとのこと。伊豆半島において海が臨めないことに対し「奥下田」と名付けることでお客様に先にイメージづけるとともに、自然の贈り物であるこの環境を活かさなければと想いのもと、大自然を活かした湯治、武道館で心を整える湯治、地の野菜、地の魚、そして温泉水でもてなす湯治に取り組んできた。日本列島は狭いので、酸性の温泉地とアルカリ性の温泉地を相互に利用することで、それぞれの効能がより高められるのではないかと。そうした温泉地間での連携プレーができること、東洋医学として素晴らしいのでは。日本文化として、西洋から東洋まで上手に活かし合えることを、観音温泉から証明していきたい、とのことでした。

*第1回セミナーの資料は、環境省HPの「チーム新・湯治」WEBページで公開しています (https://www.env.go.jp/nature/onsen/spa/spa_team.html)

展示・交流会

セミナー当日は、参加者の活動を紹介するパンフレットや図書を展示。また、セミナー終了後の交流会では、参加者より活動についてお話しいただきました。



今後の開催予定

- 第2回 温泉地を「リフレッシュできる環境」に再生する (1月25日(金))
- 第3回 (仮) 温泉地と企業の連携 (3月6日(水))

五頭温泉郷旅館協同組合理事長の荒木善紀様からは、新潟の230社からなる健康ビジネス協議会に参画し、ラジウム温泉と地域資源を活用したヘルスツーリズムやアンチエイジングに取り組んでいること、そうした中で繋がった企業や関連団体、学識経験者の方々と今後一緒になってたくさんある地域資源を活かして独自のツアー、新しいプログラムを開発していきたいとお話を頂きました。

その後の意見交換では、各温泉地で試行錯誤して取り組んできた小さな努力の積み重ねの結果が「新・湯治」の考え方と一致しており、「新・湯治」は今後、地域で新しい活動を始める際の後押しとなるとの意見を頂きました。

また、今後の「新・湯治」推進体制についても意見交換を行いました。新しい取り組みを展開していくためのアンテナを持つ外部の方とのつながりを大事にし、分からないことは外部の方の意見や応援を取り入れ、その一方で温泉地側からも情報発信が必要との意見がありました。

新しい取り組みを進める際の地域での合意形成には地域での「ホット」な人材がキーマンとなります。そういった人材を中心に地域の関係者との連携をしながら進めていくことが重要というメッセージを発信するキックオフセミナーとなりました。

「チーム 新・湯治」運営事務局

【環境省温泉地保護利用推進室】

平成30年度運営委託事業者：

公益財団法人日本交通公社 チーム新・湯治係（後藤・門脇・吉澤・安谷）

〒107-0062 東京都港区南青山2-7-29 日本交通公社ビル

TEL：03-5770-8440 FAX：03-5770-8359

E-mail：shintoji@jtb.or.jp